



札幌地区宣教司牧評議会1日研修会が開催されました

（テーマ「キリシタン時代にみる信徒の役割」）

平成19年2月12日（月）10時から「キリシタン時代にみる信徒の役割」をテーマに札幌地区宣教司牧評議会1日研修会が開催されました。広い北11条教会の聖堂も満員になるほど多くの参加者が集まり、近藤地区長、地主司教の挨拶の後、午前の部は、本研修会講師の高松教区溝部司教から講話をいただきました。その後、午後の部はあらかじめ申し込んでいた小教区からの参加者がブロック別に分かれてグループ討議と全体集会を行い、16時終了でした。



《近藤地区長挨拶》

このような集まりは、全て生涯養成の一環としてとらえています。聖書的に言えば「天の御父の種まきが今日も行われている。」ということだと思えます。私たちは、今ここに来ていますが、よく耕された土地なのか荒れ地なのか、今一度、自分の心に問いかけて、信仰のうちに成長するように、御父のみ旨の中で一日を過ごしたいと思えます。



《地主司教挨拶》

司祭が少ない時代に入りました。今は信徒の時代です。どんなに召命を頑張っても、司祭は10年後には半減します。それでも、キリシタン時代の司祭の数よりもはるかに多いのです。キリシタン時代の信徒は、そのような状態で、どのように信仰を守り、伝えたのか。それを学ぶことは非常に有意義です。

今日は、溝部司教様がおいでくださり、多くの人が話を聞けることは、大変ありがたいことです。司教様の話を聞いて、自分自身の信仰や教会のあり方を考えてください。

教会と信徒の関係は、決して商店と消費者のようなものではありません。教会とは、あなた自身であります。信徒の集合体が教会なのです。

○講話 高松教区長 溝部 脩 司教

まず最初に非常にうれしい知らせですけど、188名の列福を進めていましたが、2月6日にローマから電話があって、枢機卿会議において全会一致で福者になるのにふさわしいという宣言がされたとのことです。あとは、教皇様への答申を待つばかりとなり、秒読みの段階に入っています。



長い歩みでありました。私は25年間携わってきたので、とてもうれしく思います。

話の前にいくつかの資料を紹介します。

まず、「**殉教者を思い、ともに祈る週間**」というパンフレットですが、殉教者の特色を生かしたわかりやすい文章にしています。祈りの週間以外でも活用してください。

188名の殉教者については、ドンボスコ社から「**キリシタン地図を歩く**」という本を出しています。20年前に初版を出しましたが、歴史の調査が進むたびに訂正を重ねて、現在第4版です。188名全員を網羅していますので、よろしければ読んでください。

先週のカトリック新聞で特集を組んでいまして、キリシタン時代の一番大きな問題は何かについて少し書いています。キリシタン時代に何故これほどの迫害があったのか。何故これほど日本という国と衝突が起きたのか。最終的な理由は何だったのかを書いていきます。

キリシタン時代の教会運営

今日、私に与えられたテーマは「キリシタン時代の信徒の教会」というものです。

私は2年前に高松の司教となりましたが、その前の4年間は仙台の司教をしていました。仙台教区も札幌教区と同様に、司祭不在が大きな問題となっていました。広い面積と分散した教会、司祭の老齢化と宣教師の不在。必至の問題として扱われていたことが「今の教会をどう考えるか」ということです。

そういう時期に仙台教区の信徒の皆さんに信徒大会などで、「**現代から見たキリシタン時代の集会祭儀、信徒の役割**」というテーマで講演しました。同じような状況にあると思いますので、同じ話を皆さんと分かち合いたいと思います。

まず、キリシタン時代の教会運営についてです

が、少し歴史的な流れをおさらいします。

1612 禁教令

1614 宣教師追放令 司祭・修道者・神学生・主要信徒（高山右近など）がマニラなどへ追放された。しかし、司祭達は様々な方法で再入国し、潜伏して活動していた。

1618 司祭探索開始。この時点で司祭は80名であったが、弾圧が烈しくなってくる。

1622 長崎で25名の司祭・修道者が火あぶりで処刑。

1623 江戸の大殉教。

1624 仙台、大村の殉教。司祭が次々と処刑されていった。この時点で信徒40万に対して司祭は40名。幕府は教会はもう終わりだろうと弾圧を緩める。

1626 しかし、教会はいっこうに衰えないため再び弾圧が始まる。

1643 最後の司祭が処刑され、日本に司祭はいなくなる。

幕府は、司祭がいなくなれば教会は終わると見て、司祭の探索・処刑を中心に弾圧を行いました。ところが、カトリック教会はこの事態を予測して、教会の運営方針を大きく転換していました。幕府は気づいていませんでしたが、信徒中心の教会にシフトしていたのです。その方法は、組という組織を通して行われました。

組を通して信徒が教会を運営し、司祭は特有の仕事だけを行う。組は至る所に分散しているので、司祭は各地を訪問してミサ、ゆるしの秘蹟、堅信を行う。他は全て信徒に任せる。そして、組の指導者が教会を守っていく。

今の教会の、教会堂があって、司祭がいて、そこに皆が集まってくるというイメージでは当時の教会は理解できません。当時の教会は、信徒がいて、信徒がつくっている教会共同体が至る所にバラバラに

あるという状況です。

各所の指導者が自分たちの共同体を運営しています。子供に勉強を教え、洗礼を授け、結婚式に立会い、死者を葬っていたのです。毎日曜日に、一緒に主日の祭儀を行い、集会祭儀者が話をし、その話を皆で分け合って、祈りと賛美を捧げるという信仰の日々です。当時の司祭達の基本的な考え方は、信徒に教会を任せるといことです。任せるといことは教会の戸締まりなどをさせるのではなく、方々に散らばっている教会のお世話をさせるということでした。



司祭達が迫害が始まる前から集中してやっていたことは、多くの信徒の前で話をするということではなく、何人かの信徒を徹底して養成し、指導者にしていくことでした。司祭が不在になっても教会が生き延びていくことを考えていました。

教会共同体の育成 ー組についてー

ポルトガルに信心会というものがあって、それを日本で“組”としました。信徒同士が助け合う互助会のようなものです。日本では、早くから組がつくられています。組には資本金があり、それを貸したりしていました。銀行のようなものです。そうして、資本金を増やしていった、必要な人を助けるという方式をつくっていきました。

信徒の救済に使ったり、当時は戦国時代で困窮した武士が長崎に流れて来ていましたので、彼らの救

済を行う目的もありました。何とか自立したら、お金を返してもらおう。利息を取れるところからは取る。また、貧しい人たちのために教会の前に寄付箱を置く。さらに、病院や孤児院をつくったりと、かなり大きな力を持っていました。

これらの運営を行っていたのが、司祭ではなく信徒でした。組の指導者を親といいます。この親とは経営者ではなく、信心会に属する霊的な父親でした。組の親が主体となって霊的読書をし、祭儀を行い、講話をする。組に属する人たちは、集まって話を聞いて祈る。迫害が行われる前から、こうした組が作られていました。

迫害が始まってからは、司祭達は組の姿を変えていきます。教会共同体を育成するグループとしてとらえ、徹底して組をつくっていきます。信者救済や社会活動から共同体の運営へと組の役割をシフトさせていきます。

こうして、イエズス会のサンタマリアの組・聖体の組、ドミニコ会のロザリオの組～殉教の歴史はロザリオの組を抜きには語れません。どれほど多くの殉教者がロザリオの組から出たことか。フランシスコ会はコルドンの組～コルドンとは苦行のための紐のことです。それぞれの修道会が日本の教会のために組をつくることに徹底していました。また、それぞれ異なる特徴をもっていました。そのため、時には争いを起こしたりしましたが、その違いを通して信徒が育成されていったことも確かです。

組は50人の小組というものが一つの単位です。人数が増えると別の小組ができます。今でいう基礎共同体です。50人単位で徹底して信仰を深めていきます。小組がいくつか集まって大組になります。小組には組頭、大組には組親が1人います。子供の組や女性の組もありました。

司祭は定住していません。たとえば、米沢教会は司祭が定住したのは1年くらいです。ところが、信

徒だけで運営していた米沢教会の信者数は3,000名でした。しかも、迫害時代に入ってから教会が始まっています。どうして、東北地方で迫害時代にこれほど信徒が増えたのか。それは、コルドンの組が頑張っていたからです。彼らは自分の周りにいる一人ひとりに洗礼を授けていったのです。司祭に頼らない教会があったからです。キリシタン時代の教会は、組という組織に着目しなければ理解できません。

組における信徒の役割

組の親のことを“談義者”と呼んでいました。主日に信徒が集まり、談義者が中心になって集会祭儀を行い、講話をし、祈り、賛美の歌を唱う、靈的読書を行う。その後、輪座という形で、皆で囲んで話を分かち合い、深め、よいすすめを与え合う。こうして、共同体を作り上げていきました。

現在の集会祭儀を、司祭がいらないから行う祭儀の1形式と捉えるのではなく、教会共同体という面から、集会祭儀はどういう意味があるのか。集会祭儀を任されることはどういうことなのか。ということ掘り下げて考えていくための材料がここにありません。

また、当時の靈的読書は単なる読み聞かせではなく、「キリストにならいて」などの本を反復して暗唱するまで読んでいました。明治になって浦上で信徒が発見された時、彼らは何も持っていませんでしたが、皆同じことばを言えました。それを記録していくと一冊の本であることがわかりました。

最初の談義者の典型が高山右近の父の高山ダリオだったことが記録に残っています。司祭がいなくても、高山ダリオと右近の父子が教会を運営していました。また、多くの組親が高山右近の影響を受けています。そして、全国に波及し、教会は広がっていききました。

組の親はおそらく誓願をしていたと思います。自

分の生涯をかけて神と人々に奉仕しますという誓いです。集会祭儀から求道者の教育、洗礼、結婚、病者の訪問、葬儀など何でもやっていました。ありとあらゆる方法を用いて信徒の育成に力を入れてきました。だから、迫害の時代でも信徒の数は増えていたのです。

キリシタン時代の信徒

歴史を少し戻しますが、1633年から迫害は徹底したものとなりました。徳川家光は鎖国令を敷き、徹底した迫害に方針を替えました。1638年までの5年間で司祭はほとんど処刑され、東北地方に数名を残すだけとなりました。しかし、司祭はほとんどいなくなったのに、教会は無くなりませんでした。信徒中心の教会になっていたからです。

幕府はそのことに気づくと、今度は組の親を捕まえるようになりました。そして、各地の教会を摘発していきます。そして、5人組、10人組という密告制度を全国に張り巡らせて信徒を摘発し、過酷な拷問によって仲間を裏切らせ、相互に不信感を抱かせて共同体を内側から崩していくという悪魔的な方法で教会を潰していきました。このようにして、残った司祭も捕まっていき、1643年に最後の司祭が処刑され、日本に司祭はいなくなりました。

それでも教会は続き、迫害も続いていきます。1660年代以降「崩れ」という弾圧がありました。豊後崩れ、郡崩れ、美濃崩れなど一度に数百から千を超える信徒が投獄・処刑されました。それだけ、信徒が多くいたということでもあります。司祭がいなくてもかわらずです。

昔の先輩たちが生きた時代をみると、信仰を守ることがどれほど大変なことだったかを痛感します。それだけに、教会の中で自分たちが信仰を守っていくという意気込みと喜びも大きかったと思います。

代表的な信徒は米沢の甘糟右衛門です。米沢の教

会はイエズス会の影響を強く受けていましたが、同時にフランシスコ会の影響もありました。両会の接点になっていたのです。甘糟も両方の影響を強く受けていました。甘糟は全ての組の親であるとともに、上杉藩の家老でした。甘糟を中心に米沢教会は3,000名に信徒を増やしていきました。



教会の歴史をみると、司祭は頭で行動しがちです。理想と情熱で行き過ぎる面があります。当時の信徒は、司祭にただ従うばかりでなく、時に抑えたり、忠言したり、一緒に方針を考えたりしていたようです。ある意味、司祭にとっては煩わしい存在だったかもしれませんが、実際、こういう信徒達が教会を増やしていったのです。

日本の教会は、初めから信徒中心の教会へと動いていました。ここにフランシスコ・ザビエルの偉大さを見ます。ザビエルの方針は、①日本の文化に適合する。②日本人を育成する。③教会の柱を日本人にする。これがザビエル以来の日本の教会の伝統です。これこそ素晴らしい日本の教会の伝統でありました。それがいつの間にか、日本の教会はもらい根性に慣れてしまいました。とくに戦後は、教会もお金も全てもらって、信徒は日曜日に教会に来て聖堂に座っていればいいという形になってしまいました。

かつて日本の教会は信徒を中心に運営されていました。信徒が本当に頑張っていた教会です。そのこ

とが、殉教に至ったただひとつの原因といってもいいのです。

現代の教会の課題と信徒の祭司職

現在の教会には、解決しなければならない課題が多くあります。今、一番の大きな課題は、司祭と信徒の役割がよくわかるということです。だから、司祭が少なくなるとあわてます。司祭の高齢化のデータをみるとお先真っ暗という感じですが、キリシタン時代を考えると、希望的・楽観的な教会があるのではないのでしょうか。状況をふまえた上で、頭の切り替えをして、信仰実践から考え方が変わっていけば、全然違う形で教会は発展していくと思います。

組織の再編とかいろいろなことが議論されていますが、組織に手を付けただけでは教会は生まれません。教会は組織ではなく、一人ひとりの意識下にあるものです。教会とは何であるかという意識を持つことが、一番大きな課題であると思います。

整理しますと、①教会とは何か。②教会の中で司祭と信徒の役割は何であるか。③司祭と信徒の関わりはどうあるべきか。こういうことを冷静に考えることが必要です。

このために祭司職について考えてみましょう。

私たちは洗礼を受けた時から“祭司”です。祭司職をいただいています。“祭司職”とは、神様と人々の仲介の役割です。洗礼によって私たちは、神様と人々の間に立つ人間として選ばれたのです。

私たちは、周りに生きている人々の思い、悩み、苦しみ、願いを携えて神様のもとに行き、神様に訴えます。神様は、自分が選んだ愛する子供である私たちの訴えを聞いてくださり、何をすべきか教えてください。私たちは神様のメッセージを人々に届けます。これが、洗礼を受けた私たちの祭司職です。皆祭司なのです。私たちは祭司職を生きることが大事です。あなたが果たすべきキリストの祭司職

が何かを理解しなければなりません。

主日のミサに来て聖堂に入る時、あなたは自分が祭司であることを思い出しますか。人々の真摯な願いを持って、御父の前に立っていますか。人々の願いをキリストと一緒に捧げるのです。これが“ともに捧げるミサ”です。そして、神様は答えをくださいます。そして、最後は「行け。」と言われます。

祭司職は何物にも代え難い大きな恵みです。洗礼によって、人々の願いを聞いて神様に届け、人々に神様のメッセージを伝える役目を与えられた。これを“**預言的な賜物**”といいます。たとえ老齢になっても、今日、自分が置かれた立場でどのように祭司職を行うかを考えなければいけません。そのためには自分が祭司であるという深い理解が必要です。

司祭と信徒の共同体

「たくさん司祭がいて、全部やってくれればいいのに。」と思っははいけません。司祭がいなくてもやっていけると考えることもいけません。司祭が司祭らしい仕事ができるように共同体をつくっていかなければなりません。信徒が本当に目覚めた時、その信徒の共同体から司祭が生まれます。キリシタン時代、全ての司祭は熱心な共同体から生まれています。組の親を通して、共同体が自分たちの信仰をしっかり守っていくから、中から司祭が生まれます。司祭の役割をはっきりとわかっている司祭が生まれます。

私たちは、たぶん、子供に伝える信仰を持たなかった世代です。若者の教会離れは必然的なものです。自分だけの信仰でした。これだけは必ず伝えなければいけないという根幹を持っていませんでした。この結果、司祭がいなくなっ、慌てふためいているのが今の状況です。司祭を何としても生み出さなければならぬと考えるよりも、自分たちの共同体はどのようなものであるか。自分たちの祭司としての

役割はどのようなものであるかを考えることが必要です。

司祭は、信徒の共同体がつくり上げていくものです。それは今も昔も変わりません。司祭がいなくて嘆かないで、どうしてそうなのか。自分たちが1本筋の通った共同体づくりに成功したのかどうなのかを考えてみてください。お客さんばかりの共同体からは何も生まれてこないことを理解しなければいけません。

キリシタン時代は信徒の意識が全く違う。それが今、光を放っている大きな理由です。信徒が自信を持っていました。

私たちは信徒は司祭に従うものとしてきました。司祭と信徒は互いに尊敬して教会を運営することをやってきませんでした。そして今あわてています。

今からでも遅くありません。悲観的になる必要はありません。時代とともにいろいろな知恵が出てきます。それが神様のやり方です。こういう状況の中で自分たちができるかことは何であるか。自分たちが受けている祭司職は、かけがえのない大きな宝であることをはっきり意識した上で、もう一度、教会とは何かという根本的な問題を考えてください。

グループ討議と全体集会

午後の参加者は、現行の4ブロック（東西南北）に分かれて話し合いを行い、溝部司教も各グループを回って討議に参加してくださいました。

各グループの討議内容については、全体集会で報告されました。多くの発言がありましたが、主なものだけ紹介します。

○東ブロック…岩見沢、江別、大麻、小野幌、月寒

- キリシタン時代の司祭と信徒の使命感は、現代の我々にも通じるものがあり、自身の問題として考えていきたい。



- 信徒の時代といわれて久しいが、現状はこれでよいのか。反省を込めて今後活動したい。
- 洗礼によって祭司職を受けたことについての認識が足りなかったことに気づかされた。
- 西ブロック…倶知安、富岡、住ノ江、手稲、円山
 - 殉教や迫害の歴史について認識を新たにした。
 - 今の司祭の姿を見ると忙しすぎて気の毒だ。それで召命が減っていると思う。信徒がもっと仕事を分担しなければならない。
 - 教会が楽しければ、多くの人が集まると思う。楽しい教会をつくっていききたい。
- 南ブロック…千歳、恵庭、北広島、山鼻、真駒内
 - 歴史を知ることの大切さと信徒の祭司職について思いを新たにした。
 - 自分に与えられた祭司職と預言職を意識して、役割を果たしていきたい。
 - 列福は日本の教会が変わる象徴的な出来事になると思う。
 - 今日のお話を聞いて、これからどうしたらよいかについて話し合った。
- 北ブロック…新田、花川、北26条、北11条、北1条
 - キリシタン時代も現代も同じ神のことばを聞いている。同じことばを聞いている者として、我々も同じように伝える喜びやそれに伴う苦しみや可能性を持っている。
 - 当時の生活と我々の生活は全く別なものだと思っ

ていたが、ひとつにつながっていることがわかった。

- どんなに辛くても、当時の司祭・信徒はイエス様を伝える喜びがあった。同じことばを聞いている我々も伝える喜びをもっていかなければならない。
- 司祭が司祭らしい仕事に専念できるように、負担を軽減しなければいけない。

《溝部司教によるまとめ》

共同体づくりについては、基礎共同体と基幹共同体の両方を連携をとって進めていかなければなりません。とくに、小さな共同体づくりは非常に難しいものがあります。熱心さのあまり教会を崩してしまうこともあります。熱心さも大切ですが、バランスはもっと大切です。一人ひとり状況や条件が違うのですから、皆を同じ方向にもっていこうとする性急さは避けなければなりません。ある型にはめようとすると反論できない人は離反していきます。正義を持ち出すといがみ合いが起きます。あまり無理をしてはいけません。

地域の文化や特性をよく理解したうえで宣教を考えた方がいいでしょう。「カトリック教会はこうあるべし」ではいけません。キリシタン時代の組は、仏教の“講”をそのまま教会に入れたものです。それをこなし教会は発展しました。昔の人は本当にすごいことをやったと思います。

今日の研修で、新しい信徒の時代・司祭と信徒の協力の時代における積極的な信徒の役割というものについて、考えていただけたなら良かったと思います。

そして、共同体づくりに向かっていかなければならないと感じたなら、日を延ばさないで、帰ってすぐに共同体の方向性について提案してはいかかがでしょうか。10年後には大きな実りがあるでしょう。

…カトリック北広島教会をご紹介します…



北広島教会の概要

- ◆主任司祭は：勝谷太治神父
- ◆信徒数は：約450名
「南ブロック」(山鼻、真駒内、恵庭、千歳)の一員です。
- ◆保護の聖人は：聖フランシスコ・ザビエル。
- ◆北広島教会の位置は：道道46号線、通称江別恵庭線通りに面しています。
住所は北広島市中央4丁目5番地4
- ◆交通機関は：JR線北広島駅下車徒歩10分
- ◆略歴：1896年(明治29年)巡回教会落成
1913年(大正2年)5月 教会新築落成
1973年(昭和48年)9月 新聖堂落成
1996年(平成8年)11月地主司教を迎え
巡回教会設立100周年を祝う。
記念誌「主とともに百年」発刊

【特徴と課題】

平成17年に夕張教会と長沼教会が北広島教会に統廃合されました。

夕張教会は遠方の事もあり、毎月1回日曜日の主日ミサを行っています。その日は北広島教会では集会祭儀を行っています。集会祭儀のスタッフとして6名が登録され、奉仕しています。

北広島教会は信徒会館がなく行事等は聖堂の椅子を取り除き行っており、信者会館も含め、拠点教会としての充実を図る必要から教会建設委員会を立ち上げ、検討を始めました。

勝谷主任司祭は、天使幼稚園の園長のほか、宣教司牧評議会幹事司祭として、また企画推進スタッフも兼ねており、病人訪問、勉強会など、多忙な日々を送っています。今の札幌地区では司祭の減少により、ますます業務も増え自分の時間を持てる体制にはなっていません。

北広島教会内外での信徒の活動

教会財政の一本化や宣教司牧評議会と一体となって活動する体制と小教区の活性化を図る事から、平成16年5月の総会で規約の改正を行った。

◆運営組織

☆運営委員会—主任司祭・修道者代表・運営委員2名(委員長1名 副1名)・総務部・財務部・典礼部・広報部・社会福祉部・施設部・養成部・第1～第4ブロック代表・評議員(2名)から成っています。

◆ブロック制になって、大祝日の祝賀会の準備・運営バザー等の分担など奉仕活動の活性化が図られた事や一部のブロックでは家庭集會が開かれた。

遠隔地や病気・高齢で来られない人に定期的に、会報・聖書と典礼等の送付もおこなっている。

他ブロックとの交流も必要との意見もあり、毎週土曜日の掃除当番はブロックの枠を超えて行っている。

葬儀等でブロックでの動員が困難な場合等は全体で実施している。

◆規約改正に伴い、個人的に行っていた活動も各部に一本化が図られた。活動内容としては

☆社会福祉部では毎月2回の例会でエイズベビーに送る「ABCキルト」の製作や各ボランティア活動の窓口と協力を行っている。

- 「天使の園」の洗濯ボランティア

- ・アルコールリス「虹の会」ミニバザーの開催で「イースターブレッド・ミンダナオを支える会」の支援協力
- ・視覚障害者と共に歩む会「虹の会」への支援（点訳と点字印刷）
- ・各地域支援希望の方への対応（現在6名支援）
- ・使用済切手・テレカ・リングプルの回収送品
- ・日力連女性の会「環」の活動

☆養成部では教会学校や侍者会のほかに

- ・幼児の母親を対象としたつぼみの会
- ・福音の分かち合い（月2回開催）では小野幌教会からも参加されている。

◆主日のミサ後にコーヒーバザーを開催して募金活動を行い教会の建設資金に献金しています。

◆今後の活動計画と課題

教会共同体について理解をし、集会等により、つながりと連携を深め新しい教会共同体づくりを進めたい。

☆共同体として情報の共有化、教会の運営委員会・各部の活動進行状況が信徒に伝わっているかどうか。また信徒の考え意見が伝えられているか。必要な情報の伝達方法・機会をさらに検討していく必要がある。

☆ブロック活動を進める

- ・ブロック体制ができ3年目を迎え、行事分担、バザー協力等は順調に進んでいる。
- ・ブロック内の方々に注意が向けられるようになり、会報その他の連絡情報が届くようになった。
- ・その他の活動では、ブロック内での話し合いの他、ブロック代表会議等で、学び合い、協力しあうなど互いに研鑽していく必要がある。

☆教会諸活動へのタレント登録

- ・教会内外の活動は次第に広く広範囲になっているため、各自が持っている専門技術（タレント）を有効活用できるように、登録しておくことも必要になってくる。

例：教会を訪れる外国の方への対応、教会設備の簡単な修繕（大工・土木・溶接・電気等）、行事での移動支援（車保有・大型免許）、財務会計、弁護士、家庭相談員等々

【地区ブロック制の目的と対応】

◆司祭の少数化への対応のため

1. 司祭・信徒の話し合いの場をつくる事について

毎月開催される運営委員会へ司祭が出来る限り出席し、必要に応じ意見交換をおこなっている。

教会の活動の責任は主任司祭にあるが、信徒同士で考え行動する事で司祭の負担を軽減する環境づくりに努められている。

2. 主任司祭と協力司祭が互いに補完することについて

2004年度には千歳・恵庭教会の兼務で、主日のミサを交互に行ったが、兼務が外れたため該当なし。

3. 集会祭儀の機会が多くなる事への対応について

集会祭儀司式者（聖体奉仕者を兼ねる）が現在、6名登録して、対応している。

4. ブロック間の協力体制について

地理的に離れており、一回の会合を持ったほかは教会学校の合同キャンプを持った以外は活動していない。

5. 教会内での奉仕に小教区を超えた協力について

上記と同じで該当はなし。

【まとめ】

■北広島教会でも他の小教区と同様に、司祭・信徒の高齢化と若年層の減少、働き手の減少が大きな問題としてあげられます。

平成16年に長沼・夕張教会と統合したが、特に夕張地区の信者のミサの参加や廃止された教会の維持・管理などに、小教区だけでは解決できない大きな課題が残っております。

将来の札幌地区の具体的な方策、地区の拠点教会のあり方が示されないままでの、ブロックとしての協力・活動は無理があると考えられます。

教会運営の組織の統一化・財政問題・要理担当者の養成等の課題が解決されない限り地区の統合は困難と考えられます。

宣司評の活動から・高齢者部会 1月例会

2007年1月14日（日）山鼻教会で養成委員会・高齢者部会の例会が開催されました。参加者は75名でした。ペラル神父の特別講話を紹介します。

「ビ。モンタント」（登り行く人生の会）

ペラル神父

「登り行く人生の会」とは、高齢者を福音化する運動です。

それぞれが自分の人生の目標を定め、それに向かって人生を新しく、より豊かに歩いて行こうとするグループです。人生の目標とは：何か自分にあって、それをすることに楽しみや喜びを感じる事が目標なのです。周りの人、社会から感謝されるものであれば良いのです。

この運動の対象者は、家族を養う仕事から解放され、自由な時間ができて、これからの人生を「人生の仕上げの時期」にしたいと望んでいるすべての人が対象となります。

「ビ。モンタント」は国際的な組織で、50年前にパリで生まれました。退役軍人のアンドレ・デュミエルは、聖書を読みながら「神は今も自分たちを必要としている」と目覚め、「高齢者が使徒として生きる運動」をスタートし、「ビ。モンタント」と名付けました。その後、教皇庁から承認され、ヨーロッ

パ諸国を中心に急速に広がり、今、世界60カ国に約30万人の会員を数えるようになりました。国連にも、その活動内容が高く評価され、国連から正式にNGOとして認められ、オブザーバーとして参加しています。

日本に初めて「ビ。モンタント」運動を紹介したのは、函館のグロード神父です。1984年に富沢司教の応援を得て、日本初のビ。モンタント「旭が丘黎明倶楽部」が誕生しました。その後、東京でも取組が始まり、2003年に「ビ。モンタント日本」が立ち上がりました。本部は東京です。

ビ。モンタントには3つのモットーがあります。

1. 信仰
 - 人間として、キリスト者として成長すること。
 - 祈り、聖書を読み、イエスの生き方を新たに学んでいく。信徒使徒職に目覚めて、積極的になる。
 2. 友情
 - 地域社会においても、教会においても、心の通い合う友人をつくる。
 3. 奉仕
 - 高齢化社会を福音化に沿って動く。
 - 知識と体験、信仰と健康な身体を生かして、各人が出来ることからボランティア活動始める。
- 日本は世界で前例のない少子高齢化社会になり



ました。今や5人に一人が65歳以上で、今後さらに増えていきます。高齢者の増加は、病気や孤独、介護疲れや自殺などの社会問題を起こします。

福音宣教は教義の世界に止まっていたはいけません。現実社会から出発して社会を福音化することが福音宣教です。

1982年のローマ訪問の際、教皇様は「これら全ての苦しい試練に対して、ピ。モンタントのメン

バーは持っているすべての素晴らしい能力を引き出せるように活動します。そして自分自身を捧げ、使徒としての使命を果たしながら、神の光の中に入るときの準備に招かれるのです。」と仰られました。

高齢者は決していたわられる存在ではありません。教会には引退がありません。自分たちに何ができるかを話し合っ、行動に移しましょう。

典礼講演会 「典礼の喜びに生きる」

去る2月18日(日)午後1時から北26条教会聖堂において典礼に関心のある皆様「信徒、修道者、司祭」が熱心に講演を開きました。

最初はフランコ・ソットコルノラ神父様「聖ザベリオ宣教会、熊本練成センター所長」が典礼について興味深いお話しをしていただきました。それはともに祈る典礼には感謝、賛美、喜び(祝福)の三つの祈りが含まれています。

又詩編や聖書の讃歌は私達に恵みを与えてくれるよう感謝して歌いそして信仰を深めるため教会の祈りでもあるのです。

人は希望のうちに喜びを歌い「感謝への祈り」へと導かれて信徒の生活の糧になるのです。

私達は静かな心の文化も大切に力強く生きるように強調されました。

後半はエムリク神

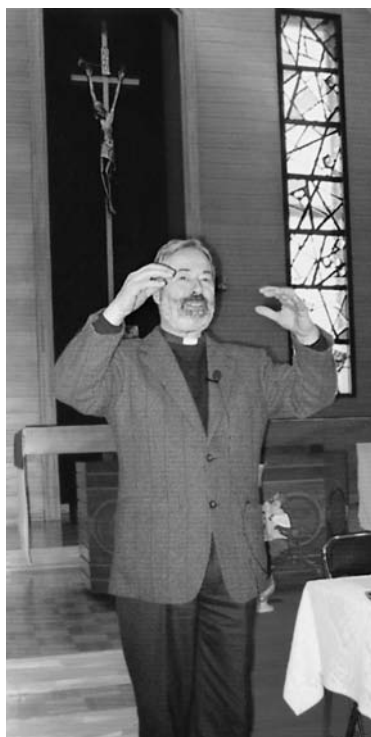
父様から「テゼ共同体」についてお話しがありました。

25歳のフランス人の青年がテゼと云う小さな村に住み観想と労働の生活を始めたのが「コミュニティ」であり今ではいろんな国の青年達が集って祈りの生活に感謝し沈黙を守りながら霊的な深さに気付き共同生活を送っている話でした。

詳しくは「家庭の友」2月号に掲載されております。引き続き小野幌教会の金子さんから「テゼ共同体の歌」のいろいろな歌い方を教わりました。

短かいみ言葉を繰り返しゆっくりと心に染みるように歌いそこに神の愛の静かな呼びかけが聞こえてくるように感じました。

日常生活の中で「テゼの祈り」のひとつときを味わうことも大切な事ではないでしょうか。



ガリラヤの家

哲学科一年 神能 和己

栃木県那須町から人里離れた山奥にある東京カトリック神学院初年度養成施設『ガリラヤの家』。去年4月に神学院に入学した私はこのガリラヤの家に一年間、6名の神学生とモデラートル（養成担当司祭）の神父様2名の計9名で共同生活をさせていただきました。

練馬にある神学院の生活とは違い、初年度養成の場であるガリラヤの家での生活は祈りと労働、そして基礎学習が中心です。

朝5時半の起床から始まり、朝の祈り・ミサ・朝食・掃除・授業・昼の祈り・昼食・労働・夕の祈り・夕食・寝る前の祈り・就寝……と平日はこの繰り返しです。

毎日皆でする祈りは「教会の祈り」を用い、授業は主に新約・旧約の聖書全般の通読とカテキズムを中心に基礎を学びます。

午後の労働は週1回の老人ホームでのお手伝いと、週3回の敷地内にある福祉施設のお手伝いです。福祉施設でのお手伝いは3つに分かれており、工房・農場・シイタケ栽培場の3箇所のうち、私が選んだのはシイタケ栽培でした。過去に森田神父と加藤助祭が経験した作業だったそうで『神能くんもそこ選びなよ』と仰せつかったのが決め手でした。

作業の大半は施設の利用者さん達と5~10kgあるシイタケの原木を山から登ったり降りたりして運ぶというものでした。利用者さんたちが疲れすぎないようにと、労働時間は3時間くらい。十分過ぎるくらい大変な作業ですが、利用者さん達との会話のおかげで本当に楽しくこの時間を過ごせ

ました。

1年間、ガリラヤの家で生活をして得たもの、それは「私はこんなにも神に愛されているのだ」という実感、そして神との会話への参与を可能にする『祈り』の大切さです。

新しい環境、また人間関係で時には傷つく日々の生活の中で、どれだけ祈りが心を落ち着かせ、豊かにしてくれたことでしょうか。事実、私は祈りによって、また多くの方々の祈りの支えによってこの1年を過ごしてきました。

神学校ではこれから学ぶことが沢山あります。しかしながら、いくら知識を蓄えても、いくら成績が良くても、それらの土台となる大事な事柄を何処かに置いてしまっただけでは元も子もありません。土台となるもの、それは神の愛によって生きる信仰です。

4月から始まる東京での生活において不安は色々ありますが、この土台をしっかりと携えて臨んでいきたいと思っています。

皆様、どうか私の為にお祈りください。私は祈りなしでは本当にすぐダメになるような弱い人間です。

私もまた、皆様の事をいつも意識して神学院から祈っています。



編集後記

春の訪れとともに、札幌教区に大きな恵みが降り注ぎました。去る3月21日カテドラルにおいて、ミカエル森田健児司祭、ヨゼフ加藤鐵男助祭が叙階されました。祝福のために駆けつけた沢山の人が聖堂に入りきれないほど溢れて、天においても地上においても大きな喜びの日となりました。神の国の完成を目指して、兄弟姉妹がともに手をたずさえ、心をひとつに歩いていくことを希望のうちに感じました。